
君に捧げる愛しい考察

海月くらげ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に捧げる愛しい考察

【Nコード】

N1799I

【作者名】

海月くらげ

【あらすじ】

人によつてはどうでもよくて、でもそれって案外大事なことも
しれないね？

真剣に考え込む彼と、そんな彼にツッコむわたしの日常。

幽霊についての考察

「幽霊っていないと思う」

「何を藪から棒に…幽霊？いるかもしれないじゃん」

「いや、いたら怖いからいない」

「何の根拠もなしか…しかも怖いからって…」

——幽霊を怖がるなんて、ずいぶんらしくない。

「人間てさー終わりがあから生きていられると思うんだよね」

「うん？」

「生きものはいつか死ぬだろう？だから安心して生きられると思うんだ。だって、終わりがなくいまま、ゴールも見えないいまま、ずっと生きているっていうのは苦難以外の何物でもない。いつか死つていうやすらぎが手に入ると確信しているからこそ、生きていられる」

「でも…でも死ぬのは怖いよ？」

「それでも、それでも永遠を生きるよりはずっといい」

死にたがっているわけではないとわかっているけれど、時々、彼は生きていたくないんじゃないかと思ってしまう。

「俺は今、生きているだろ？そして考えている、何かを思っ、て、思考している」

「たまにそれが苦しくなるんだよ」

彼は、昔からよくわからないことで悩む人だった。

ある日1日中ずっと何かを考えて考えて考えて、夕方やっと口を開いたかと思えば、

「ここに、時を止めることのできる機械があると仮定する。それを使用している本人以外の時が止まる。使用しているやつは、動くことができる。機械を解除すればまた世界は動きだす。」

「つまりは周囲の時は止まっているのに、そいつの時は止まっていないんだ。1秒でも使用すれば、それだけ解除した時に周囲との時間の流れに差が表れる。ズレが生じる。」

「で、ここからが本題だ。時を止めたままでもそいつの時間はどんどん流れていく、つまりは年をとる。時が止まったままの世界でそいつが老衰でも心臓発作でもいいがとにかく機械を解除しないまま死んだ。時は止まったままだ。世界はどうなる？」

「時間という概念は対象があって成り立つ。時間を時間と意識する者がいて初めて時間は時間になる」

「止まった世界は時間の流れがない」

「しかし止まるという現象は時間の上に成り立つはずだ。使用者が生きているうちはいい。そいつが時間を意識する。でも死んでしまつたらどうなる？腐敗して風化するという時の流れはあるかもしれない。しかしいつか消滅する。その時、世界はどうなるんだ？永遠という概念も成り立たなくなるのに、永久に止まり続けるのか？」

なんてくだらないことを延々と考えているのだろっ、と呆れに近い感嘆さえ覚えた。だいたい、ありもしない機械を使った仮定をそんなに小難しく考える必要なんてまったくないのに。

ほかにもありがちな「卵が先か、鶏が先か」で本当に倒れるほど悩んでいるのを見たときは呆れ返つてもものも言えなかった。

しかし、彼も好きで考えているのではないらしい。

無の境地、というものを知らない彼の脳は、彼に常に思考することを要求するのだそうだ。

どんなささいな疑問さえ、見逃すことを許してくれない。気になつて気になつて、知らず知らずに深く考え続けてしまう。

そして、起きているうち、いや夢まで思考に侵されるという苦痛

は、想像以上に彼から生きる氣力を奪っていったのだろうか。

だから、彼はこんなにも生きること執着しないのだろうか。

――夢さえ見ない永遠の眠りに焦がれるのだろうか。

「幽霊がいるってことは魂もあるだろう。死後の世界も存在するかもしれない。たとえば周囲に認められなかった恋人たちが心中したとする。それはあの世で結ばれたいって気持ちがあつたからだ。でも死後の世界でまた会うことができたとしても、一つ忘れていることがある」

「なに？」

「死後の世界、あの世にはそいつらの先祖や先に逝つた知り合いたちがいるってことさ。あの世でも反対されたら逃げ場はもつどこにもない」

「うーそつえばそつね」

「あの世に行かずに浮遊霊や地縛霊になったとしても、ずっとずっとそのままでいるってことは辛いよ。死んでもからも重荷を背負っている。終わらない日常を繰り返し続けるのは辛い。辛いと意識するのが辛い」

「人間関係に疲れて、でもがんばって、やっと終わったと思ったらまた死んだ後にも世界がある。しかも輪廻転生がなければ今度は永遠だ。転生するとしたら終わらない輪をまた永遠に繰り返し続ける。だとしたら、いつ、休めるんだ？本当に安らげるのはいつだろう」

「だから俺は幽霊が怖い。その存在が怖いんじゃないで、存在するっていう事実があったら怖いんだ」

彼はたぶん何も考えなくていい時間が欲しいんだと思う。全部を忘れてなくしても、たとえ自分が消滅してもそれを望むんだ。

永遠の終わりこそ、彼が最も願うもの。

ならば永遠の続きを示唆する幽霊の存在はとても恐いに違いない。

でも、それでも

「でもさ、でも生きるとは楽しいよ？ たった百年じゃ、足りないよ」

わたしは彼を見つめながら言った。

わたしの考えはきつとどうしようもなく無責任なエゴなのだろう。

それでも。

「美しいものはどんどん生まれてくる、今この瞬間にも。まだ世界中の本を読み切っていない、美味しいものも食べきっていない。行ったことがない場所ばかりだし、見たことがないものもたくさんある。綺麗な歌ももつと聞きたいし、大きな声で歌いたい。猫を撫でるのは気持ちがいいし、お昼寝やひなたぼっこも大好きだよ。それに――」

言葉にならないこの想いを、どうやって彼に伝えよう

幽霊のことなんて、死んでから考えればいい。死んだ後なんて知

ったことじゃない。

—— ねえ、どうしたら今、そしてわたしを見てくれる？

そんな先の、途方も無い未来ばかりを見ていないで、わたしを見て？わたしのことだけ考えて？

途中で言葉を切ったわたしを、彼がじっと見つめている。

まるで、今まで悩んでいた問題、これから悩むであろう問題の、すべての答えをわたしが知っていると信じているかのように、何かを切望する瞳で、わたしだけを見ている。

わたしは答えを知らない。
だけど、今、伝えよう。

—— わたしが彼に贈れる、唯一のものを。

「一緒に考えよう。きみの問いがすべて消えるまで、ずっときみの

そばにいるよ。何も考えることがなくなれば、さっぱりして安心して終わり迎えられる。」

「ずっと?」

「ずっと」

「一緒に?」

「そう、一緒に」

全部解けるまで。問いが消えても。
わたしの永遠を君に贈ろう。

照れたようにうつむいて、素直じゃない彼がつぶやいた。

それは、悪くないね。

神についての考察（前書き）

今回は彼女の疑問です。

神についての考察

かみさまっているの？

幼いわたしの問いに母は何と答えただろうか。

「神様って何だろうね？」

「創造主、絶対神、いろいろあるけれど俺個人の意見としては傍観者かな」

「ぼつかんしゃ？」

「見てるだけってこと」

「そうなの？」

「あくまで俺が思ってるだけだね。どんなに善人でも悲惨な人生送るやつもいるし、逆にどんなに悪人でも家族に見守られながら大往生するやつもいる。どんなに祈っても願っても望んでも動かないで見ているだけならば、傍観者だろう」

「そっかー」

「それに俺は奇跡は人がおこすもの、って考えは悪くないと思う」

「賛成」

「お前は？」

「うん？」

「神様って何だと思ってる？」

「うーん」

対象、かなあ？

「は？」

「うん、対象」

「？」

「えっと、さあ。例えば・・・ってかわたしのことなんだけどね。わたしはすぐすぐ器が小さいんだよ。いろんな意味で。

だからすぐにいっぱいになって内側から弾けそうになる。弾けて壊れてしまったら、元には戻れないでしょう？

だから神様に押しつけるの」

「...？」

「うーんと、ね。悲しいこととか苦しいこととか、あるでしょ？どうしようもないくらい、大きくて重いでしょう？両手いっぱい、耐えきれなくて、それでもまだ降ってきて、湧いてくる。ね？堪えきれないでしょう？そんな時、人はただ

神様！！

って叫ぶでしょう？訴えかけることができる、どんなに理不尽で不可能な呼び掛けも許される、自分にとっての絶対の対象、それが神様なんだよ」

「
…」

「感謝でも、怨嗟でも、聞いてくれる存在はありがたいよね？」

「たとえ血を吐くような慟哭でも。」

「たとえばゆいばかりの歓喜でも。」

「思いの対象、か」

「そう」

全ての生きとし生けるものの声。

志半ばにして果てるものの断末魔。

誕生し、最初にあげる産声。

小鳥の囀り。

狼の遠吠え。

乙女の囁き。

老人の眩き。

子供たちの笑い声。

野性の馬のいななき。

木々の葉擦れの音。

戦場の鬨の声。

母親の子守歌。

喪うものの慟哭。

全ての声なき祈り。

本当に、抱えきれないほどの。たくさんの、とても、もう、耐えきれないほどの。

「対象、か」

「呼び方は違ってもいつの時代、どこの場所、どんな状況でも、たとえ”神”という概念がなかったとしても、わたしたちは呼び掛けることを許されている」

俺には、親がない。

生きているのかもしれないが、いない。

こいつも、親がない。

目の前で、殺された。

（かみさま）

（かみさま、どうしてですか）

（どうか）

（かみさま）

（かみさま）

（たすけてください）

（かみさま）

（どうして、ぼくにはあたえられないのですか）

（かみさま）

（どうしてわたしからうばうのですか）

（かみさま）

（かみさま、わるいことをしたのならあやまります）

（よいこでいます）

（ですから、かみさま）

人一人ですら抱えきれないほどの思いを、悲しみを、怒りを、世界の中から投げ付けられる。

一人で立つこともできないほどの思いを抱え込んだ人々から縋られる。

「神様ってさ、別に願いを叶える義理、義務？とかないんじゃない

かな」

（かみさま）

「神様っていうのはそういうもんじゃないのか？」

「それを決めたのはたぶん人間だよ、人間の、弱さ」

（かみさま、ほかにはなにもいりません）

「願いを叶えて欲しいから祈るんじゃないのか？」

「君は神様を傍観者って言ったよね？ただ見ているって」

「ああ」

「わたしは見ていてくれるっていうだけでも、十分だと思う」

「…」

（ならば、かみさま）

（みていてください）

（きいてください）

（いつか）

「それだけで、わたしにとっては価値がある」

（いつか、あなたにあうそのひまで）

（かみさま）

「生きる、価値がある。わたしは、どんなに見苦しくても、生きたんだって叫べる」

（そばにいてください）

「…」

「きっと、最後の瞬間までわたしは叫ぶだろうね。押しつけるよ」

「わたしは、生きている」

それは、たぶん最も単純で、最も強烈な。
生命そのものの、叫び。

「生きている——か」

「そう、わたしも君も」

あの日、一緒に、ずっと一緒に考えてくれると言った彼女。
俺にとっては、彼女こそ絶対で、不変の、対象。そんなこと、口
にはださないけれど。

「見ていてやる。聞いてやるよ」

「ずっと傍にいる。押しつけてくれても構わない」

ずっと一緒に。

「ずっと?」

「ああ」

いつかの繰り返しのように。
俺も、俺の永遠を君に贈ろう。

神様は確かに俺たちを拒絶しない。受け入れてくれるだろう。

けれど

声をかけることもない
抱き締めることもない

それは、生きている人間の役目だ。

だから俺は昔も今もこれからもずっと、手をつないで名前を呼んで一緒に生きていく。

それは、なんて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1799i/>

君に捧げる愛しい考察

2010年10月23日10時55分発行